

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年 9月 29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 京都大学大学院教育学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年生

氏 名 NI NAN(ニ ナン)

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	ヨーロッパ認知心理学会第24回大会		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他(		
発 表 題 目	Cognitive strategy use in backward serial recall (逆順再生課題における認知方略の使用)		
開 催 場 所	イギリス・シェフィールド・シェフィールド大学		
渡 航 期 間	2025 年 8 月 26 日 ～ 2025 年 9 月 8 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	199,695
		宿泊費	52,921
		滞在費	
		学会参加費	47,575
	その他(ビザ申請料・保険)	49,809	
	以上に助成金を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびは貴財団のご支援をいただき、心より御礼申し上げます。学会では、多くの研究者と交流する機会を得て、国際的な研究ネットワークの構築に繋がり、大変貴重な経験をさせていただきました。また、助成金の振込や利用手続きについて柔軟にご対応いただいたおかげで、渡航手続きを円滑に進めることができました。改めて深く感謝申し上げます。		

成果の概要/NI NAN(ニ ナン)

京都大学大学院 教育学研究科 博士後期課程 3 年生

1. 国際学会について

本助成により参加したヨーロッパ認知心理学会 (European Society for Cognitive Psychology, ESCoP) 第 24 回大会は、2025 年 9 月 2～5 日にイギリス・シェフィールド大学で開催された。本学会はヨーロッパを中心とする認知心理学の学会であり、知覚・記憶・言語・推論など人間の認知全般に関する研究領域を扱い、学術雑誌「Journal of Cognition」を刊行している。大会は 2 年一度に開催され、世界各国から認知心理学の研究者や大学院生が参加し、最新の研究成果が報告されるとともに、研究者間の交流が促進される場となっている。

2. 国際学会の成果

大会では、「Cognitive strategy use in backward serial recall」という題目で英語ポスター発表を行い、逆順再生課題における認知方略の使用に関する研究成果を報告した。逆順再生課題は知能など認知機能の評価に広く用いられるが、課題遂行時にどのような認知方略が用いられているのかは十分に解明されていない。本研究では、これまでに実施した認知トレーニング実験から得られたデータを活用し、言語刺激および空間位置刺激を用いた逆順再生課題における認知方略使用の主観報告を系統的に分析した。その結果、複数の方略が頻繁に使われていることが確認され、単一の方略では課題成績を説明できず、むしろ複数方略の併用が重要であることが示唆された。更に、方略報告の洗練度(方略の数や記述の具体性)は、参加者のベースライン成績と正に相関するが、実際のトレーニング効果とは関連しないことも明らかになった。これらの知見は、人間が複雑な認知課題をどのように遂行し、方略を形成していくかを理解する上で重要である。

学会開催中は、他の発表や講演も聴講し、積極的に研究討論や意見交換を行なった。特に、認知トレーニングにメタ認知的な要素を取り入れる手法や、トレーニング効果を最大化するアルゴリズムの開発などの先端的な研究に触れ、自身の研究に活かせる新たな知見を得た。また、以前から知り合いの海外の研究者に加え、今回新たに出会った研究者とも英語で活発に交流し、自分の研究ネットワークを広げることに努力した。例えば、Nelson Cowan 教授や Jean Saint-Aubin 教授をはじめ実験心理学・記憶研究分野で有名な研究者とも直接議論する機会があり、理論的枠組みや逆順再生課題の行動データと認知方略の分析手法について有益なフィードバックを受けた。更に、本学会には本研究室の大学院生も初めて参加しており、自ら交流の橋渡しの役割を果たした。海外の研究者に後輩を紹介し、英語での議論に加わる機会を作ることで、後輩の国際学会参加を支援した。これらの経験は、若手研究者として他の研究者と協力して、研究を進めるスキルを実践する機会となり、将来研究チームを運営する上でも貴重な学びとなった。

3. Claudia von Bastian 教授ラボ訪問の成果

学会終了後、シェフィールド大学の Claudia von Bastian 教授の研究室を訪問し、ラボミーティ

ングで講演を行い、教授及びラボメンバーと研究討論を行った。von Bastian 教授は認知機能及び認知トレーニング研究分野のトップ研究者であり、直接の交流を通じて当該分野に対する理解を深めることができ、今後の国際共同研究へと繋がるきっかけになるかもしれません。討論では、認知課題における方略使用やビデオゲーム・トレーニングの効果に加え、学習能力向上を説明する「Learning to learn」仮説や「Cognitive routine」理論などについて多く議論した。また、実験データのモデリングを用いた分析手法や認知方略使用の測定・分析方法の改善についても具体的な示唆を得ることができ、新たな研究方向を見出した。更に、博士課程修了後のキャリアや国際共同研究の展望についても意見を交わし、短期渡航による研究交流や研究費応募の戦略に関して助言を得ることができ、海外におけるポスドク挑戦への視野が大きく広がった。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回の国際学会への参加及び研究訪問を助成いただきました京都大学教育研究振興財団に、心より感謝申し上げます。本助成のおかげで、以上の概要に報告させていただいたように、充実した研究討論・国際的な研究ネットワークの構築を経験することができました。これらの貴重な経験を活かして、今後も研究の更なる発展に努めて参りたいと存じます。